

# 日本台湾学会 ニュースレター

*The Newsletter of the Japan Association for Taiwan Studies*

第24号

<目次>

- 卷頭言 1  
特集 台湾研究の新しい風 2  
学会・シンポジウム等参加記 12  
日本台湾学会活動報告 15

称ではなく、17世紀に始まるオランダによる植民地統治によって生まれた新しい都市名で、1942年日本軍占領によってジャカルタ (Jakarta) へと改称された経緯がある。地名に植民地の歴史記憶が刻まれている点は、台湾でも同様の例をいくつも探すことができる。いずれにしても、羅福星の人生を辿ると、台湾を取り巻く広い世界への多角的な視点がなければ、台湾研究が一面的になってしまふことが実感できる。

一方苗栗事件の重要な舞台となった大湖という場所は、台湾という枠組みで考えれば、その多様性を示す実例である。たとえば、自らの故郷である苗栗の近代史を物語の時空間に設定し、台湾の人々が日本の植民地統治下で送る苦難に満ちた生と死を、大河小説のように描いた李喬の長編三部作『寒夜』の冒頭に、「大湖は新しい開墾地で、先住民はそこをマオーと呼んでいた。大湖は実際、マオー社付近にあり、大陸の梅県からやって来た住民が開墾した小盆地にすぎなかつた」(李喬『寒夜』岡崎郁子・三木直大訳、国書刊行会)と、この地の特徴を簡潔に表現した文章がある。つまり、ここは古来台湾の先住民族が暮らしていた地であり、そこへ中国大陆から移民(特に客家系の人々)がやって来て、開拓した経緯があって、初めて苗栗事件の舞台となるのである。先住民族、大陸からの移民、客家の人々、占領者日本と、いくつもの歴史的地層が重なり、またその結果として社会に多様な要素が誕生する。台湾を取り巻く外部空間への多角的な視点だけでなく、そもそも台湾 자체の多様性を前提にしなければ台湾研究が立ち行かないのは、もはや言わずもがなことだろう。

## 卷頭言

### 台湾百年の時空を繋いで

#### —年頭所感

日本台湾学会理事長 山口守(日本大学)

今から百年前の1913年、台湾では苗栗事件と呼ばれる一連の抗日活動が発生され、苛酷な弾圧を受けた。その中心人物羅福星(1886-1914)は台湾で生まれ育った人物ではなく、インドネシア在住華僑の父親とインドネシア・オランダの血筋を受け継いだ母親の間にバタヴィアで生まれ、中国広東で育ち、17歳の時に初めて台湾へやって来た。アジアに広がる華人ネットワークを示す例とも言えるが、その後、羅福星はシンガポール、インドネシア、タイ等で辛亥革命前の革命活動に参加して、事件表面化の前年1912年に台湾へ戻っている。台湾の近代初期を考える際、ナショナリズム形成の視点から中国大陆との繋がりを検証するだけではなく、広くアジアの近代を視野に入れながら研究をしなければならない理由の一端がそこに窺える。ちなみにバタヴィア(Batavia)は現地の古来の呼

## 特 集

### 台湾研究の新しい風

#### 「華麗島文学志」とその時代

——これまでの研究成果と今後の課題

橋本恭子（日本社会事業大学非常勤）

こうしたことを年頭に考えたのは、年末に苗栗大湖にある羅福星記念館と彼を顕彰した昭忠塔を見に行こうとして諸事情から果たせず、代わりに研究出張したマカオのプロテスタント墓地で、ロバート・モリソン (Robert Morrison, 1782–1834) やジョージ・チネリー (George Chinnery, 1774–1852) の墓碑の傍に中国語で書かれた石碑があるのを見たからである。スコットランド出身でロンドン伝道協会の派遣で中国へ布教にやって来たモリソンは、聖書の中国語訳刊行や流通、ミッション・スクール創設等に尽力し、国語・出版・教育など文化教育面で中国の近代化に対して、後にウェスタン・インパクトと総括される大きな影響を与えた。またロンドン出身の画家チネリーの描いた中国南部・香港・マカオの風俗や人物は、西洋が中国やアジアを見る眼差しという点でオリエンタリズムの範囲内であっても、視点の主体たる西洋と客体たるアジアが、絵画という二次元空間でどのように交差するか（しないか）を考える上で貴重な資料である。その二人の墓の傍らに中国語の石碑があり、特に1934年モリソン逝去百周年を記念して、墓の傍らに建立された中国語石碑に「モリソン先生は息を引き取る時、百年後に信徒数は何万倍にもなっているだろうと語った」と書かれているのに注意を惹かれた。その時なぜか頭に浮かんだのが羅福星のことだった。28歳の若さで処刑される時、羅福星は百年後の台湾に思いを馳せただろうか、生まれ故郷のバタヴィアを思い浮かべただろうかと、台湾やアジアの時間と空間を繋ぎ合わせて考えてみたくなった。「中華民国孫逸仙救」の八文字を行頭に並べた辞世の句を残したと言われるほど、共和制中国に熱い思いを込めた羅福星の夢は、その後の歴史を見れば実現したとも、実現しなかったとも言える。獄中に詠んだ詩の中で「自由を愛せよ」と叫んだ羅福星の理想は、台湾でどのように根付いて行ったのか。台湾百年の時空を読み解く研究は、人を惹きつけると同時に遙かな道でもある。

さて、今年の学術大会は5月25–26日の二日間、広島大学で開催される。戦争や核兵器の歴史記憶が刻まれた広島で、台湾学の学術大会が開かれることには、学術研究上でも、平和の重要性を確認する上でも大きな意義がある。多くの会員がこの学術大会に足を運んで、活発かつ熱のこもった討論が行われることを期待したい。

「若手特集」ということで執筆依頼をいただいたものの、年齢の点からいうと、私は決して「若手」ではない。ただ、長い間一般企業に勤務していましたこともあり、研究歴の点では確かに「若手」の部類に入る。そこで、多少のためらいはあったが、お引き受けすることにした。昨年2月に博士論文『「華麗島文学志」とその時代—比較文学者島田謹二の台湾体験』(三元社) を出版し、約10年にわたる研究が一段落ついたこともあり、ちょうどこれまでの研究を振り返り、今後の課題について考えるべき時期でもあった。

私は修士論文から一貫して島田謹二の在台日本文学史『華麗島文学志』を研究対象としてきたが、修士課程は台湾の清華大学中文研究所で学んだため、「台湾文学」の領域に限定した考察であった。その後、日本に戻ったこともあり、博士論文は日本近代比較文学の領域にまで枠組みを広げ、「台湾文学」と「比較文学」にまたがる学際研究を目指した。その過程で気づいたのが、これら二つの学問の場で『華麗島文学志』に対する評価が大きく異なっていたことである。

まず、日本の比較文学の領域では、同書はほとんど注目されず、議論されることもなかったが、台湾文学の領域では、発表当初から今日に至るまで一貫してポレミックな書として、数々の議論を引き起こしてきた。ただし、残念ながら、「誤読」と「誤解」に基づく批判に終始し、その批判も台湾文学研究の領域内に留まり、日本の比較文学者にまで届くことはなかった。そこで、本研究ではテクストの「理解」を通して、両者の間に橋をかけ、対話の契機を作ることを目指した。

『華麗島文学志』および島田謹二の台湾体験は、実際、今日に至るまで日本の比較文学研究の方向性に多大な影響を与えている。1930年代にヨーロッパの比較文学を受容し、日本の学問に作り直していく過程で、島田が15年戦争下の植民地台湾に身を置いていたことは無視できず、「台湾」という「場」は、日本近代比較文学の成立に大きく関わることになった。そこで本研究では、『華麗島文学志』が島田にとって、学んだばかりの比較文学理論を具体的に実践する一種の実験場であったと捉

え、ヨーロッパの近代比較文学史から論を起した。

ヨーロッパの近代比較文学は、第一次大戦から第二次大戦までの戦間期に盛んになった学問だが、文学の国際主義を掲げ、狭隘なナショナリズムを克服し、他者や異文化に対する寛容の精神を育むことを目指していた。島田もその点は十分理解し、排他的な一国主義や日本主義を拒否し、在台日本文学を広く世界の「外地文学」との比較考察を通して、いわゆる「一般文学」(littérature générale)研究として進めていく。特に、フランスの植民地文学研究を参考に、植民地における宗主国人の文学を史的に考察し、その上で在台日本文学の傾向や課題を見出していった。ただしそれは、世界の「植民者」の文学に在台日本文学を位置づけ、彼らと連帯しようとする一方、すぐ隣に共存する台湾人や「台湾文学」との間には一線を引くことになった。つまり、島田は「文学の国際主義」という比較文学の精神を十分理解しながら、それを適応したのはあくまで西欧文学に対してであり、台湾の文学については一国主義的な態度を堅持したのである。結局、『華麗島文学志』が如実に物語っているのは、島田の「比較文学の精神」がヨーロッパとアジアに対して一様には働かなかつたということである。これが、島田謹二の戦前の比較文学思想の到達点と限界であったが、それは戦後になっても変わらず、日本の比較文学の発展に影を投げかけたことは否定できない。

私は、「台湾文学」の領域から『華麗島文学志』に対してなされるべき批判は、まさにこの点に向けられるべきで、最終的には日本の比較文学のあり方に見直しを迫るようなものでなければならぬと考えている。しかし、残念なことに台湾文学研究者からの批判はうまく機能していなかった。というのは、これまでの島田批判が、『華麗島文学志』は台湾人の文学を扱っていない、という点にのみ集中してきたためである。つまり、「書かれていないこと」への批判に終始する反面、「書かれていること」に対しては十分な検討がなされてこなかったのだ。そのような批判には生産性も発展性もなく、とうてい日本の比較文学者にまで届くことはないだろう。

もうひとつ、従来の批判がうまく機能しなかった原因は、『華麗島文学志』を十分理解した上でなされたものではなかった点にある。というのは、これまでの研究が 1940 年代の台湾文壇を背景に一部のテクストを読み解くことにのみ終始し、全体の形成過程を 1930 年代後半の時代状況や在台日本人の時代精神と切り離して考えていたためである。

こうした問題点を解決すべく、本書ではまず、浅野豊美氏のすぐれた「書評」に依拠し、『華麗島文学志』が 1930 年代後半以降、在台日本人に芽生えた「台湾意識」を反映した文学論であると位置づけた上で、そもそも『華麗島文学志』とは何か、その構成や論点を整理し、批判すべき点を探っていった。特に注目したのが、島田の挙げた「外地文学」の三つの課題「郷愁・エグゾティスム・リアリズム」である。なかでも「エグゾティスム」は今日に至るまで、内地文壇に進出するための方便であるとして、厳しい批判にさらされてきたが、実際には島田の主張とかなりの隔たりがある。一方、「郷愁」と「リアリズム」の二点については、ほとんど問題にされてこなかった。そこで、本研究では三つの概念を整理し、それらがまさに植民者が日々直面する極めて現実的で切実な課題であることを明らかにした。それは世界の植民地文学の普遍的なテーマであるとともに、台湾に生きる日本人一人ひとりの内在的な問い合わせでもあったのだ。特に、「郷愁」については、「植民地特有の畸形的環境」がもたらした精神的な病理であり、在台日本人の生の根幹に係わる重大なテーマであると捉えた。

これらの点については、さらなる議論が必要であり、島田批判もこれらの「書かれた」事柄に対してなされるべきであると考えている。特に強調しておきたいのが、『華麗島文学志』は確かに植民者の視点に立つものではあれ、「島田謹二は植民地主義者であった」と結論づけて終えるには、あまりにも惜しいテクストであるということだ。まだまだ多くの論点が検討されないまま残されており、特に日本統治時代の「台湾文学」研究の領域では、台湾人の文学に比べ日本人文学の研究が遅れてしまうことを思うと、今後、引き続き検討されるべきテクストであることは間違いない。文学に限らず、在台日本人の精神史なども考察されるべきであり、そうした幅広い文脈からも、問い合わせなければならないテクストであろう。

『華麗島文学志』が多くの問題を孕んでいるのは確かだが、だからこそ多様な議論も可能になるのであり、そこからは日本の植民地主義を乗り越えるための確かな理論も導き出されるはずである。同時に、『華麗島文学志』研究は台湾文学だけでなく、比較文学の分野にも新たな可能性をもたらすだろう。島田批判を「台湾文学」研究の領域に閉じ込めることがなく、「書かれた」ことを対象に日本の比較文学との対話を進め、「比較文学」を真に国際主義的な学問に開いていくための契機することが、引き続き求められていると思う。

## 党国とシンボル ——中華民国国定祝日の歴史 周俊宇（東京大学大学院）

2011年10月10日、中華民国が台湾で「百年国慶」を迎えた。しかしながら台湾社会は、全体として熱狂的な雰囲気に包まれたわけではなく、台湾民衆も必ずしも心から、この「わが国」の百歳の誕生日を祝ったわけではなかった。その大きな原因として、国民党が定義した中華民国の公式的な歴史観と、台湾独自の歴史的記憶とのズレを挙げることができるだろう。しかし、様々な物議があったとはいえ、現在の国定祝日体系において、国慶日は存在感を示す数少ない記念日の一つなのである。

現在、中華民国で休日とされる国定祝日は、大部分が端午、中秋といった伝統行事であり、政治的な記念日は、国慶日以外では、開国記念日（1月1日）と平和記念日（2月28日）のみである。2000年に「週休二日制」が導入されて以来、産業や商業活動に過度に影響を及ぼさないよう、通年の休日を一定数以下にコントロールするため、それまで休日とされた数多くの国定祝日は、休日ではなくなくなった。そしてその殆んどが政治的な記念日だったのである。

現在の国定祝日は、政治動員も殆ど行われず、休日と制定されているものも少ないため、形骸化されつつあるといえる。しかし、1990年代以前の台湾に育った人々にとって、特別な記憶や意味合いをもつのではないかだろうか。私は1980年生まれなので、1990年代における国定祝日の有様が変化し始めた時代を経験した。この変化は一体どこからきたものであり、またその行く先は一体どこのか。戦後の台湾まで生き延びた中華民国の国定祝日の歴史的考察は、戦後台湾の「再中国化」の歴史にも繋がる考え方、修士課程では、戦後台湾の統治時期を中心に、中華民国国定祝日の歴史について研究を行った。来日後は、この研究に関心を持って頂いた方々から多くのご教授を頂き、それを踏まえて加筆・修正したものが、『党国と象徴——中華民国国定節日歴史』というタイトルで台湾の国史館より刊行される予定である。

中華民国の記念日や祝祭日について、台湾では既に学術性の高い先行研究があったものの、そのほとんどが戦後台湾での変容に限定されていた。だが、戦後記念日や祝祭日は、1945年や1949年になって初めて生まれたものではなく、その起源を見出すためには、中華民国の中国大陆時期まで遡らなければならない。

日本では、近代中国における記念日を含めたシンボルとナショナリズムについて、既にいくつか優れた先行研究がある。例えば、ヘンリエッタ・ハリソンの研究以来の実証の空白を埋めた小野寺史郎の研究は総合的、かつ実証的な労作である。その研究は、清末から民国期にかけて、近代中国における国旗、国歌の成立と変容を考察したほか、記念日についても北京政府の国慶と国民政府の革命記念日政策を対象とした考察を行い、政策の実質的変容を時間軸に沿って解明した。

他にも、丸田孝志や貴志俊彦、中国人研究者の李恭忠や陳蘊茜などが、近代中国の政治的シンボルに対して考察を行い、それらにより中国大陆時期の中華民国の記念日については、その全体像がかなり明らかにされたと思われる。だが、中華民国の台湾移転後以降の変容については、まだ研究の余地があると思われる。特に戦後台湾の場合、国旗と国歌は公式的な変革はなかったが、国定祝日は複数の記念日や他の祝祭日からなり、時代に応じてそのあり方が異なる。したがって、国定祝日への考察は比較的に中華民国と台湾社会との間の歴史的記憶やアイデンティティの変容がわかるという点では重要だと考える。

また、戦後台湾の国定祝日について、川島真や若林正丈などにより、示唆に富んだ指摘がなされたが、それがどのようにして現在のような状態に至ったのかという変容過程の説明はまだなかった。そこで、本研究は政府公文書、国民党の宣伝資料、新聞等を用い、中華民国の国定祝日の戦後台湾での具体的な展開や変容への解明により、それまでの空白を埋めたと考える。以下、中華民国の国定祝日体系の特徴について述べていきたい。

まず、国定祝日体系においても、国民党が中国古来の伝統を再定義し、政権自身の正統性に流用した。国民党は1930年代に入ってから、国内外からの競争に直面し、彷徨いつつも中国古来の伝統の復興と称し、記念日や祝祭日として「孔子生誕記念日」と「民族墓参節」を設けた。自らを「古來中國の繼承者」ということを主張するためである。また、戦後台湾においても、共産党に打ち出された文化大革命に対抗するために考案された「中華文化復興運動」において重要なシンボルとなり、台湾にある中華民国こそ真の中国というレトリックに使われていた。

次は、中華民国という国民国家の有様である。ここでさらに国家、国民、そして中華民国=中央と台湾=省の関係という三点において検討を行った。例えば、中華民国こそ真の中国ということをアピールするために、国内のみならず、「國慶日」などでは、海外の華僑までを巻き込み、中華人民

共和国との対抗が繰り広げられた。また、「革命烈士記念日」では、国民党の前身である同盟会による広州蜂起とその犠牲者になった「七十二烈士」への度重なる言及を通して、反共時期のあるべき国民像を定義しようとしていた。さらに、台湾に移っても中国国家体制が変わらず健在する象徴として、「台湾光復節」の存在がある。この記念日は早くから既に大々的に祝祭が行われていたが、その位置づけはあくまでも地方の記念日であった。後に、中華民国の台湾化のプロセスに伴い、台湾光復節も正式に全国的な記念日になっていく。

第三は偉人の存在である。北京政府時期において、特定な人物のための記念日は制定されなかつたが、国民政府期になると、孫文関連の記念日の割合が増加し、戦後台湾の場合、蒋介石への崇拜はさらに動員された。例えば、その誕生日は法令上国定祝日ではないものの、全国レベルで国定祝日並みに盛大に祝われていた。国民党支配下の中華民国を通してみると、偉人の存在感如何に大きいことがここからうかがえる。

以上、本研究は国定祝日をめぐる支配者の意図と政策についてある程度解明したと考えるが、残された課題としては、被支配者の反応への把握の不十分である。民主化以降、国民党の公定イデオロギーと異なる被支配者の反応について、いくつかの知識人やエリートの日記や回想録を用い、反対派の観点に分析を試みたが、民衆の反応への分析は資料不足もあり、十分に史料に基づいて議論できなかった。党や政府のレポートを用いて断片的な分析を試みたが、系統的な分析になっていない。勿論、民衆は必ずしも文字を残さず、また残したとしても刊行する機会があるとは限らないため、分析上一定の困難があるが、今後はさらに党や政府の内部の動員関係の文書へ解説や、インタビューを行っていくことで、新たな手がかりが見つかることを考えている。

また、本研究を今後さらに発展させるには、比較研究も一つの手法だと考える。まずは、中華民国内部の地域の比較である。1949年以降の中華民国が実効支配を行ってきた地域は、台湾という「省」のみならず、金門や馬祖を中心とした「福建省」も含まれている。このような統治構造が国定祝日に反映された例として、台湾光復節という記念日は、1995年まで法令上台湾・澎湖地域限定の休日であり、金門や馬祖についてはそれなりの配慮がなされたが、休日の対象外であった。特に金門は奇しくも「古寧頭大捷記念日」という独自の記念日と同じ日であった。このように、台湾と他地域との比較を通じ、1949年以降の中華民国に

おける歴史的記憶の多様性について、さらなる理解の増進に資すると考える。

もう一つは中華人民共和国との比較である。中華人民共和国の公式のナショナル・シンボル決定の経緯が、国民政府のそれと共に通する部分が非常に多いという指摘は先行研究にあった。両党のイデオロギーの相違も、国定祝日体系に反映されていると思われるが、孫文というシンボルへの利用や日中戦争期に黄帝への祭祀の共催など、共通点がないわけではない。また、文化大革命中、伝統のシンボルである孔子や黄帝は破壊から逃れられなかつたが、1990年代以降の中華人民共和国の台頭において、これらのシンボルへの利用は、やはり国民党のそれと共に通する。このように、両党の政治シンボルをめぐる政策への比較を通して、この正統な中国を自称する二つの政権の異同はより理解できると思う。

最後に、この国定祝日体系の今後の課題について述べてみると、1990年代の民主化により、中華民国における党国体制は制度的に終わったといえるが、象徴のレベルでは党と国の繋がりがまだ存在していると考えられる。2000年以降の民進党政権による「脱中国化」政策の過程を見していくと、過去において国民党により「党化」された国家シンボルは、常に純粋な中国や中華民国のシンボルとして認識されたが、その多くは中国や中華民国のものというより、国民党のものであるといったほうが妥当であり、これは国民党政権の長期統治による歴史的記憶の喪失であると考える。現在の台湾社会では、独立や統一の問題を棚上げにしても、中華民国の国家シンボルの再検討は十分に正当性があると考えている。

### 中台関係を理解するための

### 「パンダ」という視座

家永真幸（東京医科歯科大学）

中華民国の国民党政権が移転して以来、台湾は「中国」を象徴するような文化財や動物をいかに扱うかという問題を抱えることになりました。とりわけ1980年代より民主化が進み、中国色を薄めた台湾独自のアイデンティティの確立が模索されるようになると、これはいっそう論争的な問題として浮上し、現在に至っています。

私は、この問題の歴史的な淵源を解明することは近代国家としての「中国」の特徴や台湾という地域の特殊性を理解し、ひいては今日の東アジアにおけるナショナリズムの問題を解きほぐす上で有効ではないかと考え、これまでにいくつかの事

例研究を試みてきました。その中でも特に注目したのが「故宮博物院」と「パンダ」をめぐる問題です。

その途中経過として、奇縁あって2011年に『パンダ外交』(メディアファクトリー新書)という小著を発表したため、もの珍しい研究として本特集にお声かけいただけたのではないかと思います。そこで、まずは私が何故にパンダについて調べようと思うに至ったのか、簡単に経緯を紹介させていただきます。

学部時代に中華人民共和国の外交にとっての「台湾問題」について関心を持ち始め、修士課程から若林正丈先生のご指導を受け始めました。ここで、国際社会にふたつの自称「中国」政府が並立したとき、両者による「中国のシンボル」の争奪戦がどのような外交問題を引き起こしてきたのかに興味がわき、修士論文では1925年の北京での故宮博物院の成立から2000年の台湾における民進党政権の成立までの間、故宮博物院の収蔵文物に付与してきた政治的役割の長期的な変遷を分析しました。

故宮博物院にまつわる諸問題については台湾の先行研究に厚い蓄積があるのですが、この論文は怖いもの知らず故にそれらを消化不良のまま書き上げてしまったものでした。その成果の一部は後に本会年報の第9号(2007年)に投稿し、ここで査読の先生に懇切丁寧なアドバイスをいただいたお陰でなんとか掲載していただくことはできました。1960年代中期に台北の故宮博物院の日本出展が計画されながらも実現しなかった原因は、日本政府が中華民国政府との政府レベルでの交換公文を最後まで拒んだためであったことを外交文書に基づいて指摘したことなどは、私のささやかな貢献と言って良いと思います。しかしながら、豊富な先行研究を消化する作業は今なお続いている、自分の修士論文の出来の悪さを思うたびに胸が締めつけられます。そのため、博士課程に上がってから長らく、苦悩の日々が続くことになりました。

そんなある日、若林ゼミの先輩であり本会会員でもある松岡格さんが主宰していた小さな勉強会の後、若松大祐さん、吳孟晋さんの4人で飲んでいるとき、「故宮博物院の次に家永は何をすれば良いのか」という話になりました。そこでどなたかが提案されたのが、パンダでした。当時の台湾では、民進党政権が中国からパンダの贈呈を受け入れるか否かをめぐってメディアが多少盛り上がっていました。

どうせ何をするでもなく悶々としていた私は、面白半分でパンダの歴史を調べて見ることにしました。すると、中国が外交の重要局面で他国にパ

ンダを贈る、いわゆる「パンダ外交」は中華民国期の1941年には行われていたことが一般書でも紹介されており、中華人民共和国が台湾にパンダを贈るのは歴史的に非常にねじれた行為であることが分かりました。そうであれば、中華民国政府や中国国民党が必ずや「パンダ外交」に関する記録を残していくようなのですが、中国近現代史の手法を用いてパンダを論じた先行研究は見当たりませんでした。このことを大学院のゼミや2007年3月の日台青年交流事業(張力先生、川島真先生が団長)の学生シンポジウムで報告してみたところ、思いのほか反響があつたため、しばらく腰を据えてパンダと付き合うことにしたのでした。

史料が見つからなければ何も書けないことは覚悟していましたが、台北、南京、重慶、成都の史料館を見て回った結果、幸いにも南京国民政府期のパンダに関する文書をいくらか発見することができました。それらの史料によって、たとえば国民政府は1930年代末の時点でもなおパンダにはとんど関心を払っていないかったことや、1941年に急遽パンダを中国のシンボルとして外交に利用し始めた背景には国民党の対米プロパガンダ事業があったことなどを明らかにできました。

以上の故宮博物院とパンダという事例研究を通じ、私は当座の結論として、中華民国がこれらの「宝物」を中国のシンボルとして利用し始めた主たる動機は、自国の「文明性」を国際社会に示すためであったと考えました。そしてそれらのシンボルは、1949年以降の台湾海峡两岸に現出したふたつの自称「中国」政府が、国際社会に向けて自政権の統治の正統性を主張する上でも、統治下の住民の意識を一国の国民として統合する上でも重要な役割を果たしてきたと指摘しました。

以上の研究の延長として、現在の研究テーマとしては、文化財や動植物を人間の管理下で永久に保存することを志向する欧米起源の「ミュージアムの思想」が、今日の東アジアの国家主権や国民アイデンティティの問題とどのように関わってきたのかを解き明かしたいと考えています。具体的な作業としては、まずは清末以降の中国が「ミュージアム(=博物館)」という概念をどのように受容してきたのかを整理しなくてはなりません(関連する先行研究は膨大にありますが、意外にも概括的な議論の決定版はまだ見当たりません)。その上で、これまでの私の事例研究を改めて位置づけ直し、今日の中台関係における「宝物」をめぐる問題に対する私なりの解釈を提示したいと思っています。それを博士論文としてまとめるのが形而下の目標ということになります。

研究生活のブレイクスルーになったという意味では、パンダにはずいぶんと助けられました。しかし、パンダは重要だと主張するために今後の研究を続けていく気はありません（私生活においてパンダ保護活動に協力することくらいはあるかもしれませんか…）。あくまで目指したいのは、いま私たちが暮らしているのが一体どのような地域であり、時代であるのかを歴史のベクトル上に位置づけ、広く納得してもらえる形で説明することです。今後とも本学会会員のみなさまからご助言、ご叱正を賜れれば幸いに存じます。

### 自分の研究をふりかえって —現地調査と原住民研究 松岡格（早稲田大学）

最初に投稿した論文について思い返してみると、『台湾原住民研究』8号（風響社、2004）に掲載していただいた論文がそれに当たる（「台湾原住民社会論初探」）。その論文で私は、台湾原住民の社会変化の過程を明らかにしようと目指し、戦前の植民地統治の影響について論じる際には、（タイヤル族・パイワン族など）各民族の伝統的社會構造の違いについて必ず考慮しなければならないことを主張している。これは修士論文の一部を改稿したものであるが、この時点ではまだ、台湾の原住民社会という事例を通して、社会構造、およびその変化の原理を考究したいと狙っていたように思う。

台湾の人類学・民族学では台湾原住民各民族の社会構造について論じているものも多くあり、台湾原住民が暮らす地域まで調査でかけて、原住民社会内部からの視点から独自の社会構造を描き出し、提示していくば、従来の社会理論を更新する、あるいは場合によってはその理論を覆すような可能性があるのではないか、と期待していた。いわば社会内部のみに焦点をしぼり、内部的な視点からの記述を積み上げていけば、原住民社会のことがわかったことになると、思っていたのではないかと振り返ることができる。今から考えれば、原住民社会が外界と隔絶した環境にでもない限り、そのようなことはありえないわけである。

しかし、博士課程に進み、台湾原住民の中でもパイワン族・ルカイ族の人々が住む地域を選んで実際に調査に入り、人々とつきあっていくうちに、原住民のイメージはガラリと変わった。そして、むしろ彼女 or 彼が現在取り巻かれている（多くは近代的）条件・環境の方にも目を向けるを得なくなつた。

例えば、皆、頻繁に自動車や「オートバイ」で移動している。若者や働き盛りの人々は仮に山地の集落に住んでいたとしても、バイトやら仕事やらで都市に出かけていくし、80才以上のおじいさん・おばあさんもバイクに乗って毎朝、畠仕事に出かけていく。民族独自の社会構造だ、何だと言っている場合ではないな、と思った。

ある意味一番驚いたのは、原住民の集落から車で5分くらい移動すれば、コンビニ、それどころか日本と同じ「セブンイレブン」があることだ。これで私が勝手に描いていた原住民社会のイメージは完全に粉碎された（ちなみに、現在の台湾では、日本では考えられないような巨大なセブンイレブンがあつたりするが、あれも驚きである）。

それでかえって、人々に話を聞き、史資料を読み、テーマをしづって参与観察をし、ということに専念することになっていった。実際に人々を訪問してみると、思った以上に、外来の統治者による統治や、その方法などが原住民自身の社会に対する見方・解釈に関わってきてることに気づかされた。

一方で理論的観点から言っても、社会の変化について考える上で、原住民の戦前・戦後の被統治経験について考えることがかなり重要であることにも気づき始めていた。例えば現代的現象である原住民族運動の歴史的意義について考える際には、日本統治下で原住民が考えていたこと、国民党政権統治下で原住民が考えていたことと、原住民族運動以降に原住民が考えてきたこととの異同があり、どのように関係しあっているのか、改めて確認する必要を感じていた。

また同時にこの時期に感じていたことは、先輩研究者達が、意外と日本統治時代の原住民の方々の歴史経験について調査した研究成果を公開していないかったことである。今から考えれば、そのような研究状況になっていたさまざまな原因・事情が思い浮かぶが、この時期はシンプルにそのように感じていた。

それで戦前の原住民統治について調べることになり、パイワン族やルカイ族の人々が実際に経験した日本統治時代の出来事を聞くことになった。そして大日本帝国と国民党政権による対原住民政策の間の連続性、そしてその連続する政策が原住民社会に与えた影響の帰結について論じる博士論文を書くことになった。

こうしたいわゆるフィールドワーク以外に、中央研究院・台湾大学・台湾文献館などの資料室・アーカイブなどで行った史資料調査も博士論文で行った実証の重要な根拠となつた。ただし、それは最初からこうした所に通っていた、ということ

ではなく、インタビューを受けていたいの方々が言及した出来事を確認していく過程で、こうした所に頻繁に足を運ぶようになった、という順番であったという気がする。

博士論文を書き終えてみて、不思議なことに、一人でできることの限界を以前より一層感じるようになり、かつ世界の他の地域の状況についても知りたいと思い、同じ若手研究者達と一緒にエスニック・マイノリティ研究会というものを設立することになった。

現在は、上記研究会での活動を通じて、特にトンチャイ (Thongchai Winichakul)、トーピー (John Torpey)、ブルーベイカー (Rogers Brubaker) などの業績に触れ、参加者と議論を重ねることによって、ネーションやエスニシティについての制度的なアプローチに説得力を感じている。特にこの一年ほどでは、国家や民族の境界線に関わるトピックに研究会の関心が集まっているが、こうした議論に刺激を受けつつ、台湾についてもより多角的に考えていきたいと思っている。

### 明治日本の植民地統治をめぐって ——自分の研究を振り返って 許時嘉（台湾・中央研究院博士後）

名古屋大学大学院に留学した際、修士論文では、1940 年代植民地台湾の台湾人作家の皇民文学を研究対象として、被植民者のアイデンティティとその葛藤を分析した。元々図式的な思考が好きな頭のタイプと関係しているのかもしれないが、修士の頃にはカルチュラル・スタディーズやポストコロニアル理論関係のものを楽しく耽読した。

しかし、理論だけでは何か物足りないともうすうす感じていた。博士課程に進学した後、名古屋大学大学院の前野みち子先生と文化哲学者の前野佳彦先生のご指導の下で、明治期の日本文化の多彩さと思想的活発さに魅了され、明治維新から大東亜戦争への道を歩んだ近代日本の精神構造の複雑性に疑問と関心を持ち、博士論文の焦点を東アジアの近代とそのイデオロギー研究に定めた。東アジアの近代化にともなう思想的变化、特に東洋の儒教的士大夫意識と西洋近代合理主義との意識上、思想上、文化上の対立、読み替え、入れ替えが明治日本の知識人やイデオローグたちの言論活動においてどのように生じ、行われたのか、そしてそれらの空理空論的な文明観が、現実の植民地統治や文化的諸場面に直面しその不適合を自覚したとき、どのような迂回や変形を経て現実の状況に適合されたのか、また、このイデオロギーの変

形の描く曲線は何を意味し、どのように戦前日本の膨張原理と繋がっていたのか、などの問題に対する答えを模索することが、博士論文「明治日本の文明言説と植民地統治——台湾統治をめぐって」の課題であった。

しかし、振り返ってみると、博士論文を完成させるまでは糸余曲折だった。指導教員の指摘によつてはじめて気付いたが、このテーマかかえる問題の一つは外延の限界付け、つまりどこまで止めておくか、という境界設定の難しさにあった。「外延の限界付け」はおそらく二つの時点にあった。一つは明治初期から中期までの思想家たちの論点を改めて理解しようとして、二次資料を頼りにせず、できるだけ原典を読み直すこととした頃だった。これらの思想家に関する先行研究は山ほどあったので、個人史的な研究はまったく勝ち目がなかったし、自身の意図でもないと最初から意識していた。にもかかわらず、読んでいくうちに次第にほかのテーマやキーワードに何度も引っ張られて本筋から外れた。その時の解決法はもう一度初心に立ち戻って、これらの思想家を通して何を発見しようとするのか、と自問自答し、彼らの言論の基軸を押さえることにした。

もう一つは漢詩文を明治日本と植民地台湾の接点として研究した時である。漢詩文を取り上げた理由は、単なる思想面の考察に満足せず、文明に関する思考が文化的な事象にどのように反映しているのか、という実証的な研究を博論に導入したいと思ったからだった。そのため、思想操作的な宣撫イベントの揚文会（思想面）と自発的断髪活動（行動面）に着目するほか、旧文学と新文学の転換期における文学創作の変容にも注目し、漢詩文創作の意識と帝国主義の文明意識の発展との相互関係を意図的に取り上げた。とはいって、今度は前掲の思想家を扱っていた時とは正反対で、当時の漢詩文研究の焦点は当初は非常にぼんやりとしていた。時々一週間かけて、東京大学の明治新聞雑誌文庫や大阪中之島図書館で資料調査を行ったが、正直に言うと、ただ明治期の漢詩文雑誌の原本に手を触れてそれを読んでみたいというごく単純な欲求だけで無謀に東京や大阪へ出かけることが多かった。したがって、非常に無計画に読んだ部分もあった。

それが原因で、何とか自分で収集した明治期の漢詩文資料に基づいて論文を書き上げたにもかかわらず、良い研究成果があがったとは言えなかつた。このことに悩んでいた時、指導の先生たちが助言して下さった。明治期の漢詩文の展開を研究するならば、同時期の言文一致運動を理解しておかなければならない、と。なるほど、これまで漢

詩文だけをきれいに切り離して分析していたのは間違いだったのだと気が付いた。つまり、一つの現象は単独の事件として孤立しているのではなく、事件と事件、現象と現象の関連性・連動性にも常に注意を払わなければならない。その後は、植民地への拡張という歴史を背景において、明治期の漢詩文壇と言文一致運動を並行的に観察し、『日本思想史学会』への投稿論文が採用に至るまで何度も修正した。この論文は、日清戦争後における「漢文」意識の変容・変質の問題を近代国民国家の創出の過程と植民地統治の実践との関わりにおいて捉え、その内的混乱と理論的矛盾を分析したもので、2011年度第五回日本思想史学会奨励賞を受賞した。その際、「鮮明な問題把握とその視野の先駆性、明確な手法と具体的な場面における着実な論証」という評言を受けたのは嬉しかった。これをきっかけとして、大きなテーマに挑戦し、実証をベースとしつつ、並行的視座とマクロ観察の能力を身につけることの大切さを実感した。

その延長線上に立ち、中央研究院台湾史研究所に博士後研究として在籍した期間に、東アジアで共有された前近代の「知」の一端を代表する漢詩文の素養とその文化的営為が、西洋近代主義と日本国家主義のせめぎあいの中で如何に変形、再生、逸脱していくのかを研究した。具体的な研究対象は、1898年から1904年にかけて台湾日日新報や台湾総督府に勤務し、総督府官僚と台湾人紳士の架け橋となった漢詩人、糸山衣洲である。大阪府立中ノ島図書館に所蔵される糸山の膨大な手稿を基に、前近代の「知」の創造と近代ナショナリズムとの癒着や齟齬が如何に植民イデオロギーを動搖させえたのか、という問題意識から、基本的な調査結果をまとめた。前近代の文化的営為から出発することにより、台湾研究の独自の視座と意味を再発見することができた。今後も引き続き、この問題連関を考察していきたい。

### 大正期台湾人留学生 ——研究テーマを選んだ理由と今後の課題 紀旭峰（聖心女子大学非常勤）

大正期台湾人留学生を研究対象として選んだ理由は大きく次の三つが挙げられる。第一に、従来の研究においては、植民地教育政策と学校教科書を分析したものが多く、台湾人留学生の「内地日本」高等教育機関での「知の構築」と「知の交流」はあまり問題視されてこなかったためである。第二に、留学生は、帰国後、社会中堅として活躍したのみならず、一部の留学生は在学中から諸啓蒙

運動において旗手として大きく尽力するなど、台湾近代史において重要な役割を果たしていたためである。第三に、台湾人留学生が諸啓蒙運動を推進していく中で、在京朝鮮人・中国人のみならず、キリスト教系知識人をはじめとする日本人からも多大な協力を得ていたためである。例えば、大正期において一部の台湾人留学生は結社や出版などを通じて、アジア知識人を網羅したさまざまなネットワークの構築に貢献した。そして、台湾人留学生にとってアジア知識人との出会いは、「関心の目を故郷台湾からアジアもしくは世界に向かせる機会」でもあった。

振り返ってみれば、以上のような問題意識をもつようになつた背景には、自分の通っていた早稲田大学が大きく影響していると言っても過言ではないだろう。というのも、早稲田大学を含めた早稲田界隈は、神田周辺と同様に明治時代には早くも思想団体や出版関係者が集まる地域として、多くの政治青年（政治に関心を寄せる青年）を引き寄せていた。そこでは、新亞同盟党や『亞細亞公論』などアジア全体を視野にいたアシア知識人の連携が頻繁に行われていた。その意味で、僕にとって早稲田大学は、たくさんのリソースを提供してくれる宝庫であった。

そして、日本植民地期に関する一次資料と先行研究を読み進める中で、留学生はどのように知識を吸収し、実践していたのか、また、多くの留学生に大きな影響を与えた大正デモクラシーの思想水脈とはどのようなものであったのかという問い合わせが浮かび上がってきた。こうした素朴な疑問から、研究対象と時期を大正期の台湾人留学生に絞った。しかし、上記の問題設定とアプローチが、修士課程に入ってから植民地期台湾の歴史を勉強し始めた僕に、一つの大きな難題をもたらした。それは、台湾史だけではなく、同時に同時代の日本史をも一定程度学ばなければ、自分の選んだ研究課題をクリアできないということであった。換言すれば、大正期台湾人留学生をとりまく時代背景をしっかりと把握しないままに研究を進めてしまうと、台湾人留学生の言動を過大評価する可能性が高くなるわけだ。

戦後、「外国人留学生」として、台湾からやってきた留学生とは異なり、大正期を含め戦前期の台湾人留学生はいわゆる「外地学生」もしくは「植民地人学生」であった。当然ながら、戦前と戦後では、身分の相違によって台湾と日本に対する見方にもそれぞれ異なる様相を呈しているだろう。しかし、同じ故郷台湾を離れ、日本で留学生活を送ったという点でみれば、戦前の留学生も、今日の留学生も、毎日、他者と接していく過程の中で、

アイデンティティの確認作業を繰り返しているといえる。言うまでもなく、現実的に、黃皇聰、彭華英などの大正期台湾人留学生から直接お話を伺うことは不可能であるが、彼らの残した論考を通じて、間接的に彼らと対話することはできる。もちろん当事者たちの置かれていた歴史の現場に立ち会って、文献をより正確に解読することは想像以上に難しい。それでも、彼らが残した論考は、留学生のあり方と社会的役割を考えさせてくれた。

さて、これまで取り組んできた研究課題と論考は、単に台湾史の視角から台湾人留学生を検討したものではなく、常にアジアを意識し、アジア史という座標軸から台湾人留学生の史的検討を行ってきた。とくに、当時の台湾人留学生が置かれていた環境、直面していた諸問題に接近するため、明治期から大正期までの日本国内の状況と国際情勢に留意しつつ、台湾総督府、文部省、東洋協会などの一次史料を駆使し留学生の全貌を把握することを試みた。零細な資料をかき集め、点と点との繋ぎ合わせを通して、ようやく台湾人留学生の特徴と全体像をある程度捉え、拙著『大正期台湾人の「日本留学」研究』(龍溪書舎、2012年)を刊行することができた。

しかし、戦前期の台湾人留学生を検証する際、立身出世のような光の側面だけではなく、必ず思想問題による弾圧・監視や学徒出陣や対日協力者といった影の部分に直面せざるを得ないのも事実である。それに加えて、戦後台湾の政治情勢が不安定な中で、一部の日本留学経験者のなかにはイデオロギーの相違によって当時の国民党政権のブラックリストに載せられたため、長期間にわたって帰郷を禁じられた者もいる。こうした歴史に翻弄された卒業生や早世した留学生を含め、台湾人留学生の社会的機能を捉えることは決して簡単な作業ではない。今後は、上記の問題点を念頭に置きながら、梅森直之先生が示唆してくださった「コンタクト・ゾーンとしての近代日本の大学」という視点から、大学(とりわけ台湾人が多く通っていた私立大学)という知的対話の場におけるアジア人留学生の比較研究に引き続き取り組んでいきたい。また、もう一つの研究課題は、日本キリスト教系知識人ネットワークをより深く考察することである。なぜならば、これまでの研究調査を通じて、植村正久(富士見町教会)を媒介に展開した日本キリスト系知識人と台湾人とのかかわりをある程度解明することができたが、未だキリスト教系知識人ネットワークの全体像を充分に解明するところまでには至っていないからだ。そのため、在京アジア知識人の諸啓蒙運動において重要な役割を演じた日本キリスト教系知識人のアジア認識

の系譜を分析し、キリスト教ネットワークの構図をより明確にしていきたい。

## 日本統治期の台南文学 ——なぜこの研究テーマを選んだのか 大東和重(関西学院大学)

私がはじめて台湾を訪れたのは、1999年9月8日のことでした。台湾人の友人の誘いで、台南県永康市(現在台南市永康区)にある南台科技大学へ、日本語の講師として赴任しました。恥ずかしながらそれまで、台湾のことを何一つ知りませんでした。専門は日中比較文学ですが、『恋恋風塵』(1987年)など侯孝賢監督の映画こそ見たことがあったものの、台湾文学を読んだこともなかったのです。高雄の小港機場から表へ出たときの、むせ返るような熱気を帯びた空気、出迎えてくれた同僚となる川路祥代さんの車の窓から見たスコール、自転車屋のおじいさんの話す日本語など、当日の記憶は鮮明に刻まれています。ただそのときは、やがて自分が台湾と切り離せない縁を結ぶことになるとは予想していませんでした。単に、留学に代わる赴任先程度の気持ちだったのです。

最低限用意していった台湾に関する書籍、伊藤潔『台湾 四百年の歴史と展望』(中公新書、1993年)、司馬遼太郎『街道をゆく 台湾紀行』(朝日文芸文庫、1997)、若林正丈『台湾の台湾語人・中国語人・日本語人』(朝日選書、1997年)、河原功『台湾新文学運動の展開』(研文選書、1998年)、藤井省三『台湾文学この百年』(東方選書、1998年)などから教えられたことはたくさんあります。ですが、台湾がどういう場所なのか教えてくれたのは、何といっても、毎日顔を合わせる生身の学生たちでした。

私は当時博士課程の二年目で、休学しての赴任でした。まだ26歳と若かったこともあり、学生たちの熱心な誘いに応じて、週末ごとに台南や安平で遊び、ときには高雄へと出掛けました。たまたま高専部五年生のクラス担任を務めたので、全島一周の卒業旅行にも出ました。学生の中には、高専を出てから、社会人や兵役を経て、二技部(大学の三・四年生に相当)に進学していたケースも多く、年齢は実はさほど変わりません。彼らから、返しきれない厚意を受けつつ、二年間を過ごしました。もともと台湾を研究していたわけではないので、研究の中心から遠く離れ、刺激の少ないことへの不安を抱いたこともあります。近いとはい異国にあって、複雑な体験、感情を経験しまし

た。そのことも含め、二度と戻ってくることのない、人生でもっとも貴重な時間を過ごしました。

任期を終え、茫然とした気持ちで帰国してから、たまたま『前嶋信次著作選3 〈華麗島〉台湾からの眺望』(杉田英明編、平凡社東洋文庫、2000年)を読み、驚きました。私が台南へ赴任する70年ほど前、同じく台南で、旧制中学の教員として過ごした著者の、若い研究者としての孤独、焦燥の一方で、古都台南に対する深い愛情、二度と戻ることのない時間への思いがつづられていたからです。のちイスラム文化研究の大家となる前嶋氏と自らを重ねる不遜をお許しいただくと、文字の一つ一つが、まるで自身が書いたように思いました。

それ以来、日本統治期の台南における文学活動に、関心を抱くようになりました。佐藤春夫(1892 - 1964年)が安平や台南を舞台とする「女誠扇綺譚」(以下「綺譚」)を書いたのが1925年。その後の日本統治期台湾における、日本人作家による日本語文学に、甚大な影響を与えました。台南を描く文学作品は、「綺譚」との対話から生まれたといつていいほどです。「綺譚」受容については、台南滞在経験のある和泉司さんに優れたご研究があります。

1930年代に台南研究に没頭した前嶋信次(1903 - 83年)の一連の台南歴史散歩や、西川満(1908 - 99年)が1940年に発表した「赤嵌記」、新垣宏一(1913 - 2002年)による「綺譚」考証や、「綺譚」との訣別を模索した、台南の人々を描く一連の短編などは、1930年代半ばから40年代前半の台南で、文学の花が開いたことを示しています。また、考古民族学者國分直一(1908 - 2005年)の平埔族研究も、台南を視座に台湾や東・東南アジアの文化を語って、文学の香り高いものです。濱田隼雄(1909 - 73年)も含め、彼らは台南一中や一高女・二高女などで教員をしつつ、歴史や文学の研究を進めたのでした。また、台南で生まれ育った庄司総一(1906 - 61年)は東京で、台南の旧家を舞台に日台結婚を扱った『陳夫人』を刊行、大東亜文学賞を受賞し、台湾の作家たちに衝撃を与えました。

前嶋、國分、新垣らの「台南学派」は、折から勃興した台湾の日本語文学の最盛期に際会し、『芸台灣』や『民俗台灣』で活躍しますが、何といっても地元に『台南新報』という、台北の『台灣日日新聞』や台中の『台灣新聞』に匹敵する、南部最大の新聞が存在したことでも大きいと思われます。当時の台南は、人口は台北に次ぐ第二の都会でした。記者岸東人(1889 - 1941年)の支援のもと、彼らの文章が誌面を飾った『台灣日報』(1937

年『台南新報』から改称)の学芸欄については、成功大学出身の研究者松尾直太氏に、市立図書館での詳細な調査にもとづく労作の論文があります。『台南新報』については、近年台南の国立歴史博物館・市立図書館から復刻が出て、容易に手にとれるようになりました。

日本人作家の活動は、日本統治期台南文学の片面しかありません。当然ながら、台湾人作家の文学活動がありました。1930年代半ば、『台南新報』で記者をしていた楊熾昌(1908 - 94年)は、文学仲間の李張瑞(1911 - 52年)・林修二(1911 - 44年)・張良典(1915年-)や日本人詩人らと、「風車詩社」を結成、学芸欄を舞台に活動しました。台南の街がシュルレアリスム詩の形で表現されたのです。また同じころ、郊外の「塩分地帯」と呼ばれた佳里では、開業医の吳新榮(1907 - 67年)を中心に、郭水潭(1907 - 95年)や王登山(1913 - 82年)・林芳年(1914 - 89年)らが集まって、全島規模の文学団体「台灣文芸聯盟」の佳里支部を作り、『台灣新聞』や『台灣文芸』で詩の特集を組むなどして、活発な活動を展開しました。近年台南の国立台湾文学館から刊行された『吳新榮日記全集』(2007年)のおかげで、台南の文学関係者のつながりが見えてきました。

台湾人作家と日本人作家の間には、文学活動という点では、残念ながら濃厚な交流は見られませんでしたが、台南研究という点で交遊がありました。前嶋や國分・新垣の台南研究を読むと、同好の士として、石陽唯、莊松林(1910 - 74年)らの名前が出てきます。彼らは一緒に、街を歩き、古碑に足を止め、史跡を調査し、「女誠扇綺譚」の跡をたどり、台南の歴史や文化を語り合ったのでした(莊松林については『文史薈刊』復刊第7輯、台南市文史協会、2005年6月が「莊松林先生台南專輯」となっています)。吳新榮が妻を亡したとき、台南から弔いの花束を手にかけつけたのは、國分直一でした。

また、教育熱心で豊かな家庭の多かった台南からは、高等教育を受けて、数多くの作家が生まれました。邱永漢(1924 - 2012年)、王育德(1924 - 85年)、葉石濤(1925 - 2008年)、黃靈芝(1928年-)らは、いずれも台南生まれです。前嶋の台南一中の教え子、王育徳の自伝『「昭和」を生きた台湾青年』(草思社、2011)は、日本統治期の台南の街や生活が手にとるように分かる得難い一冊です(文学とは無関係ですが、同じく台南の富裕な一家の生活がよく分かる、辛永清(1933 - 2002年)の『安閑園の食卓 私の台南物語』は文庫化されました、集英社、2010年)。楊熾昌や吳新榮文学の翻訳など、台湾文学の日本語訳や研究で大

きな貢献をした、葉笛（1931 - 2006 年）氏も、台南で教育を受けたゆかりのある文学者です。ご息女の葉蓁蓁さんが同僚だったご縁で、2000 年の年越しの際に、葉さんとお目にかかったことがあります、当時は愉快なお父さんだと思うばかり、著名な文学者とはつゆ存じ上げなかつたのですが。

以上の、日本統治期の台南における文学活動のうち、筆者がこれまで描いたのは、前嶋・國分・庄司・呉新榮の、たった四人の活動に過ぎません。台南の人々への、研究者としてのささやかな恩返しとして、少しづつ書き進め、1930 年代から 40 年代前半の台南文学の輪郭を描きたいと思っています。

もちろん、台南の文学活動は戦後もつづいています。郷土愛の強い土地柄、市や県から叢書の形で、戦前戦後を問わず数多くの作家の、作品集・評論集・研究書・伝記が出ています。古くは「南瀛文学選」全 7 卷（台南県立文化中心、1991 年）があり、市からは、現在もつづく「南台湾文学 台南市作家作品集叢書」（第 1 ~ 6 輯は台南市立文化中心、第 7 輯から台南市立図書館、1995 年 - ）が出ています。県からは、文学関係の著作を多数含む、150 卷を超える膨大な叢書「南瀛文化叢書」（台南県文化局、のち台南県政府、1994 - 2010 年）や、全 100 卷の「南瀛文化研究叢書」（名称は「南瀛文化研究系列」など一定せず、同前）が出されました。塩分地帯では、赤松美和子さんの『台湾文学と文学キャンプ』（東方書店、2012 年）でも紹介されている通り、文学キャンプが開かれるのみならず、雑誌『塩分地帯』が刊行されています。

幸いなことに、これまで台湾で開催の国際学会などに三度参加させていただきましたが、中でも台南県で 2008 年開催の第 2 回「南瀛国際学術研討会」では、台湾の研究者はもちろん、同じく台南をフィールドとする植野弘子さん、藤野陽平さん、山田明広さんとお目にかかる機会を持つことができました。日本台湾学会の全国大会でも、成功大学の院で学ばれる鳳氣至純平さんとお会いするなど、台南と関わる方たちと知り合いつつあります。将来、台南を研究する方々と、台湾学会で台南研究の分科会を開いてみたい、台南の文学や歴史・文化の魅力をより多くの方と分かち合いたい、と考えたりしています。

## 学会・シンポジウム等

### 参加記

#### 第 1 回台湾研究世界大会参加記

松田康博（東京大学）

第 1 回台湾研究世界大会（The 1st World Congress of Taiwan Studies）が、2012 年 4 月 26~28 日に、台湾の中央研究院人文社会学館で行われた。私の怠慢のため、寄稿が遅くなつたが、同大会に参加した感想を記しておきたいと思う。

「台湾研究」を冠し、世界の台湾研究者が一同に会した国際学術会議は、今回が初めてである。日本台湾学会としては、川島真理事が主催者との橋渡しをして 1 つセッションを出すことで協力した。組織としては、このほか欧州台湾研究学会（EATS: European Association for Taiwan Studies）もセッションを提供したが、それ以上に個人の資格で世界各地から台湾研究者が大集合した。聴衆としては、もともと 170 名ほどの参加を見込んでいたが、それをはるかに超える 550 名の参加申し込みがあり、事務局は嬉しい悲鳴をあげていたという。

驚かされたのは、その規模の大きさである。基調講演が 2 つ、セッションが 26、フルペーパー付きの報告が 105 もあり、文学、芸術、歴史、宗教、経済、社会政治、法律、考古学、環境、言語、先住民研究などの各領域でセッションが組まれた。出席者は全て、中国語か英語で論文を発表し、報告・討論を行った。大会のポスターには、台湾の地形の上に「台湾」を書き言葉で 30 の言語で書いてあつたが、本大会の野心的な性質を象徴していると感じた。

日本台湾学会を代表して、若林正丈会員が基調講演「『述史』之志：葉榮鐘晚年的書寫活動」を行った。日本台湾学会が協力したセッションとしては、「冷戦時期台湾在東亜的存在」があり、松田康博が司会、石川誠人、菅野敦志、井上正也会員が研究報告をし、川島真、林果顕会員がコメントーターとなつた。これは日本の台湾研究の 1 つの特徴である政治外交史研究のセッションであり、会場には 120 名ほどの聴衆が集まつた。

報告の題名は、それぞれ「國府創設區域性集体安全組織的模索：甘迺政權的登場與『太平案』的提出」、「1950 年代初期台灣之『中國化』與去殖民化：以『改造』與『中央化』之影響為中心」、「How Did Japan Decide to Sever the Diplomatic Relations with Taiwan?: The Normalization of

Sino-Japanese Relations and the Taiwan Issue, 1971-1972”であり、フロアからも熱心な質問が出た。「日本では台湾の対外関係に関して、これほど詳細な研究がなされているのか」という感嘆の声も上がった。このセッションだけでなく、日本台湾学会の会員は多くが個人として多く参加しており、大きなプレゼンスを示していたものと思われる。

最終日には、全体会議としてラウンドテーブル・ディスカッションが行われ、各国の台湾研究の現状や、今後の交流について発言がなされた。王汎森・中央研究院副院長は、「台湾研究は台湾だけでやっても意味がない。また台湾研究は単独のディシプリンだけでやるよりも、多くの専門領域がともに行う方がよい」、劉翠溶・中央研究院院士は、「台湾研究では学際研究が足りない。文学は学際的にやろうとしているが、それ以外の領域の研究者は文学に踏み込もうとはしない。今後の課題である」、若林正丈・早稲田大学教授は、「1998年5月に日本台湾学会が成立した際、今まで会ったことがない人達が会うことができるようになって、大騒ぎとなった。この大会も同じであり、この情熱と国際的ネットワークを維持することが大切である」とそれぞれ発言した。

カリフォルニア州立大学サンタバーバラ校にある Center for Taiwan Studies (2003 年成立) の杜国清教授からは、北米台湾研究学会 (NATSA: North American Taiwan Studies Association) の組織状態があまりよくないという発言もあった。同学会は毎年研究大会を開いており、2012 年は 18 回目の会議を開いたが、米国でやる場合資金調達がネックとなり、また孔子学院との競争があるとのことであった。

メルボルンのモナーシュ大学の J・ブルース・ジェイコブ教授は、オーストラリアから今回 9 名参加しており、オーストラリアには学会はないが、研究者のネットワークは存在していることが紹介された。

このセッションでは今後 2 回目の大会を開催するとなったら、どうするのかについて、多くの意見がだされた。英国・ロンドン大学のダベス・フェル講師は、「研究者の中には、会議疲労 (conference fatigue) があり、会議の数を増やすことには後ろ向きである。しかも、このような大規模な会議は台湾でしかできない」と発言し、多くの共感を呼んだ。毎年ではなく、3 年か 4 年に 1 回、外国と台北を往復するような形で開催されればよいのではないか、ただし今回のような大規模な会議は台北しかできないという声が多く出された。

結局、時期は未定であるが次回は欧州で開く方向で調整されていると聞いている。これまでバラバラに会っていた世界各地の台湾研究者と一緒に介して研究交流を行ったのは、非常に快く、また心強い気持ちになったのも事実である。日本台湾学会としてどのように対応すべきか、今後議論を深める必要があると思った次第である。

論文集を統一的に中央研究院から出版する予定はなく、それぞれのセッションが様々な形で刊行することが呼びかけられた。大会のホームページ <<http://wcts.sinica.edu.tw/index.php>> は中央研究院のウェブサイトに置かれていて、発表論文の要約がアップロードされている。是非一度ご覧頂きたい。

## 「民主と両岸関係について東アジアの観点」

### シンポジウム参加記

王敬翔（愛知大学大学院）

「民主と両岸関係について東アジアの観点」国際シンポジウムは、2012 年 6 月 16 日から 17 日にかけて愛知大学車道校舎で開催された。議論している台湾、日本、中国、そして東アジア諸国の中には切っても切れない複雑な関係がある。歴史のなかに積み重ねてきた傷跡を抱えながらも、現代化とグローバル化の歩みのなかで触れ合わなければならぬ。このような中で、どのように過去に對面し、現在を理解し、未来を展望するのかは、当面の重要な課題である。今回のシンポジウムでは、「国際交流」の狙いを果たすために、発表者とコメントーターの組み合わせはほとんどが異なる国籍となった。2 日間に合計 14 本の論文を発表し、熱い討論が続いた。2012 年は台湾で総統選挙が大きな出来事であったため、今回のシンポジウムでは、総統選挙と両岸関係をめぐる議論が多かった。そして多くの発表論文は、台湾や中国と日本、韓国との比較を視野に入れた、日本で発表する意義を持つものばかりであった。

1. 基調講演 趙永茂（台湾大学社会科学学院長）「東アジア民主社会の再構築の方向—「政商代議」体制から「社会代議」の結合へ」
2. 河辺一郎（愛知大学）「台湾民主化の対外的波紋—国連、アフリカ、日本」  
コメントーター 吳志中（東吳大学）
3. 黄秀端（東吳大学）「民主化と台湾国会政治」  
コメントーター 三好章（愛知大学）

4. 楊鈞池（高雄大学）「東アジア民主化の衝撃—「ワシントンコンセンサス」と「北京コンセンサス」の動搖」  
　　コメンテーター 前田直樹（広島大学助教）
5. 趙建民（政治大学）「両岸関係の変遷と東アジア地域の安全」  
　　コメンテーター 松田康博（東京大学）
6. 吳志中（東吳大学）「地政学理論から見る中国、日本、台湾の三角関係」  
　　コメンテーター 浅野豊美（中京大学）
7. 加々美光行（愛知大学）「オバマの「戦略東移」と東アジア国際政治」  
　　コメンテーター 楊鈞池（高雄大学）
8. 松本はる香（アジア経済研究所）「海峡両岸関係の進展と平和協定——「現状維持」の行方」  
　　コメンテーター 謝政諭（東吳大学）
9. 加治宏基（愛知大学）「中国の世界遺産政策にみる政治的境界と文化実体の国際的承認」  
　　コメンテーター 王堯（蘇州大学）
10. 吳介民（中央研究院）「「九二年コンセンサス」：両岸政治修辞学の選挙への影響」  
　　コメンテーター 小笠原欣幸（東京外国语大学）
11. 張家銘（東吳大学）「社会資本と文化資本-中国における台湾、日本、韓国企業の駐在員」  
　　コメンテーター 川井伸一（愛知大学）
12. 謝政諭（東吳大学）、蔡韻竹（東吳大学）「日本の3・11東日本大地震での台湾メディアの役割と災害への関心」  
　　コメンテーター 菊池一隆（愛知学院大学）
13. 楊韜（名古屋大学）「3・11以降の日本メディアにおける「国際社会と震災支援」報道の分析—日中・日台・中台の相互関係という視点から」  
　　コメンテーター 菊池一隆（愛知学院大学）

最初に、趙永茂先生が基調講演で、台湾、日本、韓国政治の共通点の一つとして政商関係が密接であり、やがて政府と財閥が癒着し、いわゆる「金権政治」になると指摘した。続いて、加々美光行、趙建民、吳志中の三先生が、中国海軍が拡張し、海洋戦略を増強している傾向を取り上げている。それによりアメリカに「戦略東移」で抑止策を講じなければならなくさせ、さらにエネルギー資源をねらうため、南シナ海に軍事力を拡張したことを見た。松本はる香先生は、台湾と中国大陆の間での平和協議に対する温度差を指摘し、中国側が平和を主張するものの、台湾に対するミサイルなどの軍事的な脅威が逆に増強している事実を示した。そのため、アメリカに台湾へのF16 戰闘機売却を再検討させたという。

元大陸委員会副主任委員の趙建民先生の政府での実務と学界での研究の二視点からの論述も注目すべきものであった。台湾での最適な体制は「香港モデル」であると大胆に主張した。しかし、台湾の大多数の市民、特に民進党や独立派の支持者は「香港モデル」を実現すると、台湾の民主体制確保への懸念から、いまなお強い抵抗感を持っている。だが、中国側は「多元的な体制」に対する包容と台湾の現体制の維持を承諾しているからこそ、「香港モデル」が台湾問題の解決策の一つになる可能性はないとは言えないとした。

吳介民先生は、両岸が「九二年コンセンサス」に対して合意していることは、その語彙を「曖昧に操作する」ことしかないと指摘している。だからこそ、スマートフォン大手メーカーであるHTCの王雪紅会長のような企業家から、コメンテーターの小笠原欣幸先生が台湾中南部で調査したときに出会った一般の民衆まで、ほとんどは「九二年コンセンサス」の具体的な内容はおろか、その有無さえ確信できていない。王氏が「九二年コンセンサス」を支持するのは、自分の会社の利益のためでもあるが、現在、台湾一般の民衆は仕事の上で中国に関係する機会が増えているから、少なくとも「九二年コンセンサス」によって両岸関係の安定を求める意思が強くなっている。したがって、今回の総統選で、「九二年コンセンサス」など中国の要素が投票結果に影響し、おそらくそれは政党の立場や、統一か独立かのイデオロギーを超えるものであった。

そして最後のセッションは、謝政諭先生、蔡韻竹先生、楊韜先生の東日本大震災をめぐる発表である。日台間は歴史的な要因で政府間も民間も頻繁に交流し、そして地震、台風、さらに原発など、いくつかの共通した問題を抱えているため、台湾は日本の災害に共感しやすく、そして日本の事例から台湾の防災と環境対策を検討する動きも活発になっているという。台湾メディアによる東日本大震災の報道回数は、ほかの災害を遥かに上回り、台湾の民衆に1999年の大震災の苦しみと日本の温かい援助を受けた記憶を呼び覚まし、それが東日本大震災への援助寄付金が世界一に達した理由だろう。しかし、日本政府は、国際的な事情により、台湾に公式に感謝の意を表せず、追悼式での台湾代表への冷遇も日本メディアで報道された。さらに、日本の民間の自発的な、インターネットを通じた台湾に感謝するイベントが予想以上の反響を得て、日本政府と民間との温度差を浮き彫りにした。

このように、それぞれの「東アジアの観点」から意見交換を行うのは、とても貴重な交流である。

もちろん、諸般の事情により中国大陆の学者を多く招待できないことは残念なことであるものの、ディスカッションの熱さが、このシンポジウムの成功を示している。近い将来に、このような質の高いシンポジウムが台湾や中国大陆でも開催できるように期待している。

## 日本台湾学会活動報告

### 日本台湾学会定例研究会 (歴史・政治・経済部会) 活動状況 張士陽(早稲田大学)

#### 第75回

「台湾研究專著著者との対話」シリーズ第一回

日時：2012年9月28日 18:20～20:30

場所：早稲田大学早稲田キャンパス22号館8階会議室

著者：菅野敦志(名桜大学専任講師)

評者：田上智宜(法政大学兼任講師)

タイトル：『台湾の国家と文化』『台湾の言語と文字』著者との対話

本書評会で扱われた二冊は、「脱日本化」・「中国化」・「本土化」をキーワードとして、戦後台湾における文化政策／言語政策の形成過程を歴史的に分析したものである。本書評会では、国民文化の一元的政策としての「中華文化復興運動期」(1966-1976)、および「本土化」政策に呼応した蔣経国の「文化建設期」(1977-1987)の時期について著者の解説があった。それによれば、「中華文化復興運動」は蒋介石による国民統合政策の集大成であり、伝統文化を絶対化し、「全面西欧化」論を封じ込めたところに特徴があった。この時期の文化政策は、「立派な(反共)中国人」を再生産することが目標となった。一方蔣経国時代の文化政策は、政治面に合わせて文化面でも「本土化」を進めるものであった。この時期は、台湾の民俗文化が重視され、大衆文化の国民文化化が進んだ。これに対し書評者は、一元的文化政策の形成を台湾政治の構造変動と連動したプロセスとして描き出した点は非常に重要であると評価する。しかし文化政策の「本土化」が蔣経国期に始まる一方で、言語政策の「本土化」は李登輝の時期まで始まらなかったことが説明されていないと指摘した。コメン

トに対し著者は、文化政策と言語政策の「本土化」時期がずれた理由は、政策面では国語推進が未だ不十分との認識のほか、言語の統一は近代化に直結するという認識も背景にあったからであると述べた。参加者は21名。(記録者：鶴園裕基)

### 台北定例研究会

担当幹事 富田哲(台湾・淡江大学)

#### 第63回台北定例研究会

日時：2012年11月17日(土)15:00

場所：台湾大学台湾文学研究所

報告者：藤井康子(清華大学外国語文学系／輔仁大学日本語文学系)

テーマ：1920年代台湾における市制運動の展開—台南州嘉義街における日・台人の動向に着目して

使用言語：日本語

\*参加記は学会ホームページで公開しています。

### 学会運営関連報告

担当理事 垂水千恵(横浜国立大学)

#### 【第7期理事会 第5回常任理事会 議事録】 (妙)

日時 2012年12月1日(日) 14:00～17:00

場所 日本大学文理学部本館1階会議室C

出席 川島真、駒込武、佐藤幸人、垂水千恵、松金公正、松田康博、三尾裕子、三澤真美恵、山口守(以上、常任理事)、三木直大(第15回学術大会実行委員長)

欠席 下村作次郎(委任状あり)

主宰 山口理事長

書記 松岡格

#### 報告

##### 1. 理事長・事務局

###### (1) 山口理事長

・12月3日(月)に台湾の日本研究学会一行と交流協会にて面会予定。

・「新公益法人への対応等アンケート」と「独立行政法人・大学評価・学位授与機構より機関別認証評価委員会専門委員候補者の推薦」に関して、対応した。

###### (2) 垂水総務担当理事

・学会費に関して—2年・3年滞納者にはお知らせを送った。

2. 各業務担当
- (1) 垂水総務担当理事
    - ・特になし
  - (2) 三澤会計財務担当理事
    - ・特になし
  - (3) 佐藤編集委員長
    - ・投稿期限を延ばしたが、投稿が11本より増加せず。
    - ・投稿論文の審査は進行中。
    - ・投稿論文と合わせて、近年出版された台湾関係の著書の書評を掲載予定。
  - (4) 三尾企画委員長
    - ・特になし
  - (5) 松田広報担当理事
    - ・ニュースレター—ニュースレター22号は発行済（2012年10月）。23号は12月初旬発行予定。24号は2013年3月発行予定
    - ・メールサービス—現時点で481件の会員アドレスを登録済。
  - (6) 松金文献目録担当理事
    - ・2012年10月末現在で9,893件、前回に比べて272件増加した。
  - (7) 川島国際交流担当理事
    - ・政治大学副学長の林碧炤氏から台湾学会との交流の申し入れがあり、理事長とともに交流協会にて面会することになった。
  - (8) 下村閔西部会担当理事（垂水理事代理報告）
    - ・特になし。
3. その他
- ・特になし。

### 議題

1. 第15回学術大会について（三木実行委員長）  
 (1) 分科会企画・自由論題報告について（三尾企画委員長）

13件の企画申請（分科会5件・自由論題8件）があり、このうち12件の企画を採用予定。

- (2) 会場校の準備状況について（三木実行委員長）  
 開催日（5月25日・26日）二日間の開催スケジュール案が完成。

2. 会費未納者（三澤会計財務担当理事）

事務局から未納通知を出し、2年・3年の未納者56名に連絡したところ、今のところ23件の振込があった。

4年以上の未納者は退会の対象となるが、4年以上も含めて会費未納のお知らせをお送りし、あわせて退会の意思を確かめる。退会の場合も少なくとも2年分の会費納入をお願いする。

3. 理事改選について（堀内選挙管理委員長、垂水代理報告）

- 名簿の確定—1月1日現在  
 投票用紙発送—1月17日（木）  
 投票用紙の回収—2月7日  
 開票—2月14日（木）会場：大阪産業大  
 4. ニュースレター担当の交代人事について（松田広報担当理事）  
 候補者決定・調整は松田理事に一任する。  
 5. 学会賞選考について（藤井選考委員長、垂水理事代理報告）  
 ・すでにメールで依頼させていただいたように、学会賞候補の推薦について、理事の方々には1月末を期限に推薦論文についてご意見をお寄せいただきたい。  
 6. 会員の入退会について（垂水総務担当理事）  
 水羽信男、本村育恵、崔真碩、高寛、佐藤久恵、富永悠介、坂井洋、王麒麟の各氏から入会希望があり、承認された。  
 7. 次回の常任理事会の日程について（垂水総務担当理事）  
 次回常任理事会は3月9日（土）、15時の予定

### 8. その他

- ・学会の優待会員について（松田理事）

次回常任理事会で具体的に提案する予定

### …編集後記…

- ・事情により本号も担当します。「特集」の読後感はいかがでしょうか。ご感想をお寄せください。
- ・今年の学術大会はこれまで最も西になる広島です。経費節約のため、大会資料とニュースレターと一緒にお送りします。（前田直樹）

### 日本台湾学会ニュースレター 第24号

発行行：日本台湾学会（代表 山口守）

発行年月：2013年3月

#### ■ 日本台湾学会事務局

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学東洋文化研究所 松田康博研究室気付

E-mail: nihontaiwangakkai@gmail.com

#### ■ ニュースレター発行事務局

〒739-8525 広島県東広島市鏡山1-2-1

広島大学大学院社会科学研究科 前田直樹研究室気付

E-mail: JATSNewsletter@gmail.com